

自然科学の本質的目的は、一見すると混沌として定まりなき事象に、合理的で明確な整合性を付与することである⁽¹⁾。しかし歴史というものの、あるいは人間の文化に関する学問が目指すのは、人間の成し遂げたものの意味についての感覚に基づいた、ある種の特殊な明瞭さであり、そうしたものを固有の価値という視点に立って秩序立てることである。人間的事象というものは、数学や物理学の定理などのように、すべての内容を包摂しうるような、定理（定義）といった概念的枠組みに収めることは決してできない。歴史的事象は常に何ものかを意味している。言い換えると、その事象を超える目的、ないしは価値が存在していることを示している。ゴシック聖堂の意味というものは、それを物理的対象として定義するのと同じように定義づけすることはできない。唯一可能なのは、その美的・宗教的・社会的な価値を感じ取ることだけである。このことを持ち出したのは、スペイン文明（文化）という

名の歴史の大いなる産物は、データの集積に還元できるものではないということを明確にするためである。われわれはその意味と価値を明らかにせねばならないが、それは西洋世界において発展を遂げた、この文明の声をよりはっきりと響かせるためである。

歴史的構造物を組み立てようと意図することは、決して客観的なものではない。つまりわれわれが公理的（axiomático）と呼んでいるものの、つまり合理的科学において論理的に実証可能なものと、似たものを提供することはできない。歴史的判断を提供しうるかどうかは、われわれが理解しようとする歴史的生と、自分たちの生とをいかに摺り合わせるかによっている。なぜならば、歴史は説明するものではなく、理解するものだからである。こう言ったからといって、修史という学問（ciencia historiográfica）が、相対性とか、心理学的恣意性で成り立っているというわけではない。それが意味するのは、歴史を理解することは、歴史的事実の内部における、歴史家の姿が前提とされているということである。実例を挙げて言えば、アメリカの歴史的事実といったものは、それに対する共感を持たぬ者は理解することなどできない。たとえば、アメリカ人が〈民主主義〉〈協力〉〈機会の均等〉などといった言葉を口にしたとき、その意味するところを実感して理解しえない人間は、米国史の意味を把握することはできない。せいぜい米国史を一連の茫漠とした出来事の連なり、とするだけとなろう。もし歴史家の抱く実感というものが、目の前にしている事実とうまく合致していれば、米国史は明確なイメージとして現れてくるだろうし、そこには歴史家の生もまた何らかのかたちで表現され

ることとなるはずである。

今述べたことの結果として言えるのは、スペイン文化史は実感的に見て、それと無縁な視点から把握しようとしても叶わないということである。なぜならば、そうするとき存在しない何ものかについて語ることになるだろうし、スペイン文化の価値の本質を感じ取ることはできなくなるからである。もしわれわれがあらゆる文明は十八世紀の合理主義的風潮のなとか、物理学の技術的発展とか、整然として一般化した幸福追求のなでこそ、生み出されねばならないなどと考えたとすれば、そのときスペイン文明はそうしたものには一切関心をもたなかったし、それが過去に達成し、今日でも達成しているものは、それとは別の目的と好みに基づいている、としか答えようがない。近代人は《無限の進歩》(progreso infinito)と呼ばれるユートピア的王国に向けての、まともな思想と経験の旅の途上にあるとばかりに、今あるものを最高に完成されたものと見なす秩序のなかで生きてきた。したがって、西洋人にとって存在についての問題は、不確定性の領域に向けて前進することからではなく、いくつかの不変の文化的境界の内部にしっかりと定位しているという確信から出てきた(たしかに筆者が思い出すのは、合衆国のスペイン学との関わりで重要な事柄である。つまりスペイン的テーマに対する関心の大きな波が、ティクナー「Ticknor」とプレスコット「Prescott」とともに絶頂期を迎えたのは、まさに西部への拡大と冒険の大躍進の時期と重なっていたということである)。

一言で言ってしまうば、スペイン精神は常に人間の地形学の基

本的問題と永久に格闘しているような、一義的な人間性ともいいたようなものを明るみに出している。したがって硬直化した構造をもった社会、あらゆる個人が意識の究極の内奥に関する重要問題を解決済みと見なししているような社会では、スペイン的生の形態が、時としていらだたしく無分別で、またしばしば独創的で靈感的なしかたで人を驚かせ、狼狽させるような印象を与えるとしても不思議はない。わたしは長年にわたって、人生の最良の部分をこの問題の研究に捧げてきた。

スペインの現実がそうしたものであることの当然の結果としては、何世紀にもわたって、かかる文明の最も重要な側面において、スペインの内外において絶えざる論争が引き起こされたということである。というのは、時としてスペイン人自身が、とりわけ自身の問題を概念的・論理的視点または実利的形式でもって捉えようとして、物質的繁栄とか、軍事力、技術的効率性などに関心を寄せる際に、常に自身の問題を捉え損なってきたからである。今ここでいかなる論争にも首を突っ込むこともしないし、スペイン文明史が宗教的・政治的議論でもって、余りにもしばしば攻撃される原因となった、周知の歴史的原因を改めて分析しようというつもりもない。われわれはスペイン的生の様式が《歴史》のなかで展開していった方法を、今一度想起するだけに留めておくつもりである。それは他の大いなる西欧諸国民のなかに看取するものとは異なっているのである。そこからスペインにおける富や物質力や産業的技術の欠如を指摘する人々たちですら、その独創性と絶えざる魅力によって魅惑されるということが起きている。こう

したことのすべては、スペインの生の様式の本質的特徴のいくつかを明らかにする上で、われわれにとつて有益であるにちがいない。なぜならば、一民族が生死の究極的問題に直面した際にその姿をはっきり見せるのは、それが生み出したものと排除したものの応答したものと沈黙したものの、双方のなかにおいてであるからである。

スペインの生を理解するためには、成功と物質的繁栄が文化を本質的に定義づける際の必須要件であるという見方を、一時棚上げせねばならない。スペインの生はアメリカにおいて〈繁栄〉と呼ばれるものを一度として経験したことはない。またルイ十四世のフランスや、十九世紀のイギリスで起きたように、あらゆる社会的・経済的力が正常に機能した時代を経験したこともない。スペインという国は、帝國的覇権の絶頂期ですら、何度も破産の危機に陥った。カルロス五世は一五五四年に劇的なかたちで退位した後、何カ月かスペインへの帰還を延期せざるをえなかった。それは宮廷の人々に支払うべき資金が枯渇していたからである。同様の理由で、母たる狂女フアナ (Juana la Loca) の葬儀を延期せざるをえなかった。十七世紀には二つの世界の王たるフェリペ四世は、王宮での日常的な食事を準備させるのに、困難に遭遇することすらあった。スペインはあらゆるかたちの芸術において豊かであったが、当時たったひとつの心地よい家具すら発明することもなかった。布張りのイスとか、長いす (chaise longue)、ソファなどではスペイン人の発明ではなかった。文明の驚異的なかたちが開花した政治的・軍事的栄光の絶頂期においてすら、スペイン

人にとって日常生活は困窮し、問題を多く抱えていた。このことを念頭において見れば、われわれがスペイン文明の意味と、物質的幸福という見方とは別個の、彼らの高いレベルの価値観を探索せねばならないことは明らかである。物質的幸福というのは、自然環境の厳しさを緩和し、技術的な応用と発明を通して、心地よい生活を造り上げることを目指すものである。スペイン文明は物質的生産の面においてわずかな結果しか示していない。その貢献を計るのは容易ならざることである。万国博覧会の〈パビリオン〉で、さほど大きなスペースを占めることもあるまい。

現在は世界史において、他のいかなる時代にもまして、冷静にこうした状況を見極めることができる。なぜならば今こそ、純然たる知性主義とエピクロスの快楽主義への欲求に基礎をおく、こうした進歩とされるものが、何よりも便利さ以上に恐怖という面で役立つことになりはしないかと、自問するのに相応しい時だからである。

思想と倫理のさまざまな重要分野で、ここ三十年にわたって解答が与えられなかった、文化と生に関するいくつかの考え方が、今日では危機に瀕してきている。常にこうしたことが西洋文化で起きてくるたびに、スペイン文化だけは、進歩と痛みと悲惨さの間の揺れによって、重大な影響は受けてこなかったことから、その遺産は無傷のままだということを示してきた。われわれが近年の暗鬱たる時代において、表面上抗いがたい現実の武器をまざまざと目にすることで、精神の武器こそその計り知れない性格ゆえに、現実の武器と同等か、それ以上の有効性をもちうるというふ

うに考え始めている。武装や防衛線というものは、内なる防衛力を欠いた者たちにとってほとんど役立ちはない。本質的人間(hombre esencial)といった概念を完全かつ明確なかたちで明らかに出すことは、スペイン文明の主たる関心事であったし、今も同様である。

西洋文化は明確かつ精緻に定義づけられた思想という名の星のもとで、理性や概念から逸脱するものを非存在とみなし、注目するに値しないか、さもなければ、存在の暗愚の形態に対応するものとみなして、ほぼ三世紀を過ごしてきた。これは大いなる力であり、この方法によって獲得されたものは、何ひとつ失われてはならないのである。しかしわれわれは、十九世紀になって科学が宗教となり、進歩が一旦走り出せば、もはや止めることのできない社会的機構の結果である、と信じられたことに思いをいたすとき、微笑みを禁じ得ない。つまりそれは無制限の進歩に対する神話である。応用科学と技術と繁栄のそうした環境のなかで、スペイン的価値は大きな過小評価を蒙った。主たるスペイン的テーマとして、あからさまで絶対的な現実として常にあったのは、人間そのものであった。人間が自らの存在に対する意識に取って代えようとする物象のもつ価値は、全く副次的にすぎなかった。スペイン人にとって、他の人々の存在は、彼らが表象する社会的機能とか、彼らが生み出すものよりも、彼らがどういう存在なのかという一点にかかって関心があるのである。もしある人物が人間として愚かであるということが知られたとき、たとえば彼がどれほど分厚い本を著わしても、スペイン人にとって彼が以前と同様、

愚かであることには変りはない。それは相手がこの上なく裕福であろうと、高い地位にあると同様である。スペイン人にとって道徳的なエックス線でもって人を見定めようとする、こうした習性や適性というものは、実際生活の上で大きな不幸を意味しただけでなく、社会生活を営む上でもかなりの困難をもたらした。何となれば、社会生活はものを生み出す人間が尊敬に値する人物かどうかに関わりなく、客観的な産物の上に成り立っているからである。確かにスペイン人というのは、人がなすことと、その人物のありようとの間に、真正なる生命的な深い関連性を見出すことがなければ、人にもその仕事にも関心を寄せたりはしない。他者との関係において精神力や表現上の独創性を欠いた人間が、他の理由でなら価値ある人間となりうる、などということを平均的スペイン人に納得させることは至難の技である。われわれはごくありふれた状況のなかで、次のような言葉をよく耳にする。「あの方はたしかに立派な教養はあるかもしれないが、人間としてはだめだ」。わたしが前に述べたように、スペイン人にあつて、そうした性格の持ち主は、個人としても、集団としても、とてつもない代償を払うこととなった。しかしことは実際そういうものなのだからというふうに諦めねばならない。それはアメリカ人が他者のみならず、自らが抱える内なる問題と直面することを回避し、そうしたことを語ることを野蛮だと見なしている、という事実を認めざるをえないのといっしょである。文化に対するわれわれスペイン人の理解と評価というのは、我らの内なる必要性を受け入れることと、直接的な比例関係をもっている。

今の時代にスペインの生の在り方について、それを反省して弁解する必要などまるでない。西洋文明は現在、危機に直面しており、今後、それをいかに切り抜けていくべきかわからない。この問題が大西洋の彼方のヨーロッパで、われわれには関係ないと考えるとしたら、それは大間違いである。もはや理性に対する幻想は地に墜ちてしまった。理性はわれらの指針とはならなくなっている。理性にとつて代わってしまったのが野蛮な行動であつた。それは個人同士を解体して無と化す、集団的意志の暗黒的法を用いて、われわれに作用している。もしわれわれがスペインのかの天才（ケベード）の千年に及ぶ声を聞くことができるなら、彼はおそらくこう言つたはずである。

スローガンの背後に、人間そのものを探し求めよ。

人間の非人間化によつて、人間がものの奴隷と化し、本来、主人であつたことを忘れてしまったことは、本当に危険なことである。ケベードは十七世紀のバロック的偉人だが、スペインについて重大な警鐘を鳴らした。

人間は貧しい存在であつたとき、他者の富を奪い取つた。富者となつたとき、今度はその富から奪い取られている。

ケベードは同様に、戦場に赴くことなく亡くなった人々の墓に、勇ましい戦時の栄光を碑銘として刻む、という十七世紀の慣習に

ついてこう述べている。

碑銘には埋葬された人物に関わらないことが記されている。武器というのは本来身を守るためのものだが、ここでは飾りとなつている。

こうした見方をロマン主義者の熱情だと片付けてしまふのが通例であつた。しかし、われわれの文化が衰退していくのを見るにつけ、別の考え方をする者たちが出てきてもおかしくはない。今日、われわれは政府や経済、科学、教育といった様々な分野で、袋小路のなかにある。半世紀以前であれば、人々の幸福はすぐ手が届くところにあるように思われた。今では、そうした見方は消え去つてしまつた。ルネサンス以後には、黄金時代が到来するという別の夢があつたが、それも消え去つた。スペインの対抗宗教改革に関する研究によつて、われわれの歴史理解にどれほど大きな光が当てられたことか。

しかしわたしはここで、こうした分析にさらに大きな光を当てるべく、いくつかの単純素朴なコメントをしたいと考える。それは技術的進歩の異なる段階に関してである。

第一段階、人類は当初、大地という豊かな食べ物をふんだんに与えてくれる場所から得られるもので、身を養つてきた。

第二段階、人類は自然から切り離され、自然に対し生産を増大するように強いている。この目的のために技術的手段が活用され、人類の活動が拡大している。これこそわれわれが「人間化された